

伊勢物語

東下り

①昔、男ありけり。
——は——我が

②その男、身をえうなきものに思ひなしで、京にはあらじ、
——の——何の役にも立たない——に思ひ込んで、——都——いるまい。

東の方に住むべき国求めにとて行きけり。
——國——の——よい——を探し——行こうと思つ——行つ——たそだ

③もとより友とする人、ひとりふたりして行きけり。
——以前から——を——知つ——てゐる——し——て——いる——と共に——行つ——たそだ

④道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。
——を——知つ——て——いる——迷いながら行つ——たそだ

⑤三河の国八橋といふ所に至りぬ。
——いう——到着し——た——の——が

⑥そこを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、
——ハ本——渡し——た——こと——が——の——の——よう——に——分かれた形——である——ので、

橋を八つ渡せるにによりてなむ、八橋といひける。
——馬から——座つ——た——を——食へ——た——の——足——の——よう——に——分かれた形——である——ので、

⑦その沢のかきづばたいとおもしろく咲きたり。
——が——とても——美しく——咲い——て——いる——の——足——の——よう——に——分かれた形——である——ので、

⑧その沢にかきづばたいとおもしろく咲きたり。
——が——とても——美しく——咲い——て——いる——の——足——の——よう——に——分かれた形——である——ので、

⑨それを見て、ある人のいはく、「かきづばたといふ五文字を句の上に置い」とよめりければ、みな——は——の——が——言うことには——いう——

据ゑて、旅の心をよめ。」と、言ひければ、よめる。
——詠んでみなさい——言つた——の——が——詠ん——だ——歌——

⑩唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしそ思ふ

——は——の——が——詠んでみなさい——言つた——の——が——詠ん——だ——歌——

⑪とよめりければ、みな——は——の——が——詠んでみなさい——言つた——の——が——詠ん——だ——歌——

乾飯はその涙で水分を含んだので
ほどびにけり。

⑫ 行き 行き て、駿河の国に至り ぬ。

⑬ 宇津の山に至りて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、
到着し 自分たち入ろう ととも暗く細い上

蒿・楓は茂り、もの心細く、すずろなるめを見ると思ふに、
なんなく辛い目思つて、いる

修行者会ひたり。
が男たち一向に出くわした。

⑭ 「かかる道は、いかでかいりまする。」と言ふを見れば、
このよくなじみやうのすか。 言う人見る

見知つた寂しいをどうしてあつたなあ
京都で誰それといふ私が恋しく思うけり。

⑮ 京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。
都の國にある見る手元いうこと

⑯ 駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にはねなりけり
山邊現実だいつたい今を

⑰ 富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いど白う降れり。
見るヒ床だというのがとても白く降つていた。

⑱ 時知らぬ山は富士の嶺いつとてか
をこの山だ思つてか

鹿の子まだらに雪の降るらむ
富士 例えたとすると

⑲ その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ね上げ
たらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。
たよくながら形ようであつたそだ

⑳ なほ行き行きて、武藏の国と下つ総の国との中に、
どんどん進んで行つ
河あり。それをすみだ河といふ。
いと大きな河あるが

⑳ なほ行き行きて、武藏の国と下つ総の国との中に、
どんどん進んで行つ
河あり。それをすみだ河といふ。
いと大きな河あるが

・その河のほとりに群れるて、思ひやれば、

一行の者たちが

旅に出てからのことや都のことについてしまって、

思いをはせる」と

途方もなく遠くも来にけるかなとわび合へるに、

渡し守、「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」と言ふに、

が

早く

舟に乗れ。

日も暮

れぬ。

」と言ふに、

で

しまつた

なあ

とわび合へ

ている

に、

乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、

舟に乗つて、

河を渡ろ

う

と行の人々

はなんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

京に思ふ人なきにしもあらず。

舟に乗つて、

河を渡ろ

う

と行の人々

はなんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

ものわびしくて、

は

水の上に遊びつつ、魚を食ふ。

舟に乗つて、

河を渡ろ

う

と行の人々

はなんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。

舟に乗つて、

河を渡ろ

う

と行の人々

はなんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」と言ふを聞きて、

舟に乗つて、

河を渡ろ

う

と行の人々

はなんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

私 恋しく思ういるのですか、いなのですか
わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟ござりて泣きてしまつた
詠んりだけの中の人は齊に

舟に乗つて、

河を渡ろ

う

と行の人々

はなんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は

なんとなく寂しく

は

ものわびしくて、

は